

42

2015 AUTUMN



学報

挑戦。スポーツが時代を動かす

NITTAIDAI

熱烈な歓迎を受けた第3次朝鮮遠征。
創立125周年に向け、日体大の挑戦が加速する。





伝統と挑戦

▷昨今「イノベーション」という言葉がよく使われる。新しい発想、斬新な手法などを意味する言葉だ。3回目となった朝鮮体育大学とのスポーツ交流も、スポーツを基軸とした国際交流に、まさにイノベーションを起こす挑戦と言えるだろう。そのミッションのもと、日体大だからこそ実現した取り組みだ。

▷イノベーションには、優れた知見や実績の集積が必要だ。日体大は来年、創立125周年を迎え、さまざまな記念事業が計画されている。これを期に先人、諸先輩が築いてきた伝統をあらためて受けとめ、自らの使命を自覚することが必要である。

▷今号のOBOGインタビューに登場した諸氏は、体育・スポーツの実績はもとより、日体生の人間的な魅力を語っている。日体生であることの誇りを忘れてはならないと。それがイノベーションや挑戦のエネルギーになる。

学報NITTAIDAI(ニッタイダイ) 42号

発行日●2015年11月6日

発行●日本体育大学広報委員会

TEL 03-5706-0948

FAX 03-5706-0922

http://www.nittai.ac.jp/

制作協力●(株)図書出版

Special Contents

03 スポーツによる 国際平和実現のために、 果敢に行動する日体大

朝鮮遠征報告

松浪健四郎 理事長

05 日体大の挑戦が加速する

創立125周年記念事業と将来展望 今村 裕 常務理事

07 活躍するOB・OG

ラジオを心から愛する男。マスコミの営業の第一線で活躍できるのも、日体大の密な人間関係の中で培った体と気持ちの逞しさがあればこそ。

後藤 一氏 株式会社TBSラジオ&コミュニケーションズ 営業統括局 営業部

輝け!「体育大女子」。自信をもち、夢に向かって努力を継続すれば必ずすばらしい将来が待っている。そして、すてきな出会いも…。

斉藤桃子氏 株式会社ハセガワエスティ 取締役

11 日体生なら知っておきたい! スポーツ・健康ワンポイントゼミ

いま子どものからだに何が起きているのか(2)

日体大総合研究所長/保健医療学部教授 武藤芳照

13 体育科学をリードする ～大学院・研究科の取り組み

体育学部体育学科准教授 根本 研

15 日体大に新風を吹き込む

新採用教員紹介

17 日体大のいまを知る!

平成27年度 下半期クラブの主な大会成績

18 NEWS/INFORMATION

●戦没者慰霊式を挙行

●栃木県鹿沼市支援に本学の学生がボランティアで参加

●第2回NSSU Coach Developer Academy 国際シンポジウムを開催

●学校法人日本体育大学 理事・評議員馳浩氏が文部科学大臣就任



第1回日体学園祭(昭和42年)



第2回日体学園祭プログラム(昭和43年)

Nittai Story

日体フェスティバルの原点と今

日体フェスティバルは、日体大生の個性や素顔に最も触れることができる催しだろう。創立125周年、日体フェスティバル第50回を目前にした今年(第49回)のテーマは、「“FUN” FARE!〜日体大の魅力であなたを笑顔に〜」だった。来場者と日体大生が共存することで華やかな合奏を創り出し、来場者と日体大生が共に楽しんでほしいという意味が込められている。

日体フェスティバルが現在のようなスタイルになったのは、昭和42年に、体育祭と合わせて学園祭が実施されるようになってからだ。当時の学園祭開催の主旨・目的を振り返ってみる。

・開催主旨—1.体育の殿堂である我が日体大への客観的な批評を求め、また体育の重要性を対外的に呼びかける。2.文化的行事を行い身体運動と人間生活の関連性を問い、体育理念を追求する。3.学園祭を通じて、日体大の学生としての自覚を高め、団結と協の精神を呼びさす。

・目的—1.学友会活動の活性化。2.体育分野における文化活動の推進。3.他大学学生との交流。

学園祭として始まり、昭和55年度から日体フェスティバルの名称が登場するようになった。

一方、体育祭の歴史は、日本体育会が設立されて間もない明治期まで遡り、日本体育専門学校時代には「体育大会」「錬成大会」、さらにその前の日本体育会体操学校時代には「運動会」と呼ばれていた。この間、学校現場における運動会のモデルとして、併設の中学校等とも協力しつつ、創意工夫を凝らして開催されてきた。

学園祭や体育祭、日体フェスティバルは、スポーツを基軸に、日体大生が個性を発揮して、学内外との交流を深めてきた催しと言えるだろう。今日、3学部体制となりさらに多様な個性が集うようになっている。創立125周年を記念する第50回日体フェスティバルが楽しみだ。



金体育相と松浪理事長

朝鮮遠征報告書

平成27年8月28日から9月1日の日程で、朝鮮民主主義人民共和国第三次スポーツ交流が実施され、団長 松浪健四郎理事長以下、45名の遠征団が参加した。日体大は2012年から朝鮮体育大学とスポーツ交流を行っており、今回で3回目の訪朝となる。「スポーツを基軸に国際平和に貢献する」というミッションの実現に向け、トップランナーとして行動する日体大を内外に強く印象づける遠征となった。その目的と意義、熱烈な歓迎を受けた遠征の様態について、松浪健四郎理事長に寄稿いただいた。

平和を稀求する

深緑の樹々が繁る美しい平壤は、人々が行き交う賑々しさ。準戦時体制を解いて平和な日常を取り戻した市民たちにとって、「平和」を満喫できる喜びが、私たち来訪者にも伝わってきた。板門店での交渉が決裂せず、双方にとって意義ある解決。

「よくぞ訪朝してくれました。多分、来ないだろうと予想していたのに驚きました。」

日体大のカウンターパートナーの朝日友好親善協会幹部の正直な第一声であった。

日体大の朝鮮遠征は3度目。建学の精神からくるミッションに則り、国交のない国への遠征。日体大だけが行動する唯一の組織。2020年の東京オリンピックを開催する日本の姿勢を国際社会に示す使節団、男女のサッカー部を引率して達成感を覚えた。

平和でなければ、スポーツに興じることはできない。3万大観衆は、日体大を大歓声と拍手で迎え入れてくれた。朝鮮の国民たちも平和を願い、スポーツを楽しみたいという強い願望をもっている。そして、国交のない日本の学生チームを温かく応援してくれた。

それは、日体大の勇氣ある遠征、リスクを怖れず行動する日体大への理解であった。政治的には多くの課題が両国に横たわり、友好の雰囲気は漂うことのない環境下での遠征。が、すでに3度目、継続は力なりを実感する。

日体大の朝鮮遠征は、かの国に制裁を加える日本政府を裏切る行動ではない。内閣、外務省、文部科学省、私学振興共済事業団等に渡航書類を提出し、相談をしての遠征である。岸田外

スポーツによる 国際平和実現のために、 果敢に行動する日体大

学校法人 日本体育大学 理事長 松浪 健四郎

務大臣と下村前文科大臣に直接、私から今回も渡航目的を伝えさせていただいた。

私たちの目的は、あくまでもスポーツ交流、政治的会話はタブー。朝鮮は9月中旬には建国記念日、10月10日には労働党の創立70年記念式典を控えて、平壤のあちこちでそれらのための練習風景と接した。

国家体育指導委員会の崔童海委員長（労働党書記）は、9月3日の中国の抗日記念式典に政府代表として出席するため日体大との接触はなかった。交流について、東京オリンピック・パラリンピックについての会談を期待していたが実現しなかったのは残念であった。ただ、金体育大臣が観戦され、意見交換をする機会がもてたのは幸いであった。

日体大と朝鮮体育大学との間で、学術スポーツ交流協定を締結できたのも収穫であろう。これは日体大の決意を表明するもので、歴史的な第一歩として評価されようか。

大学のあり方が問われる現在、日体大の理事会では国際化を一つの重要なテーマとして推進している。国際交流センターを設置して、グローバル化社会に対応することにした。来年、創立125周年を迎える日体大としては、朝鮮体育大学のチームを招待するのも目玉の一つとなり得ようか。

日体大は、平和国家の最前線に立ち、私学の特色ある大学として存在感を高めて行きたい。

意義ある朝鮮遠征

「祈るだけでは、平和はやって来ない。」
日本と中国の国交回復は、愛知工業大学の「ピ



金体育相と訪朝団役員（金日成競技場 於）

ンボン外交」から始まった。スポーツであるがゆえ、日本政府も国交のない中国への渡航を認めたのである。本来ならば、スポーツを専らとする日体大が果たすべき役割を地方の工業大学が実行した事実を忘れてはならない。愛知工業大の勇氣と実行力に私は大きな刺激を受けていたにとどまらず、日体大の使命がいつも脳裏に焼きついていた。

「スポーツを基軸に国際平和に寄与する」というミッションだ。そこで、唯一、国交のない朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）との交流を考えた。政治的には最も難しい関係にある国。しかし、隣国である。政治問題が山積し、いまだ経済制裁中の国。一般人の往来もままならず、わずかな交流しか行われていない。だからこそ、日体大はスポーツ交流を行い、相互理解を深め、たとえ細くとも一本のパイプをキープすべきであることは多言を要しない。ただ、いかにして日本政府を説得するか、それは政府から私学助成金を受取っている大学としては難しいテーマであった。

幸い、「東京オリンピック・パラリンピックの招致活動」を展開している2012年、政府にすればスポーツ交流を推進せねばならない状況下であり、日体大の訪朝を容認するしかなかったと解している。この機会が日体大に幸運をもたらせたといえようか。「日体大の訪朝」は、内外の大きな話題となり、朝鮮政府は東京オリンピック招致に協力すると約束してくれたのである。

朝鮮の張雄IOCC委員は、アフリカのIOCC委員仲間とともに東京を支持したニュースも伝えられ、日体大の貢献が認められることとなっ



谷釜学長と女子サッカー部員の応援風景

た。オール・ジャパンで取り組んだオリンピック招致活動、日体大の行動力が評価されたのが嬉しい。また、日体大の存在感を招致委員会に認知されたのも大きい。

ともあれ、中国との国交は愛工大、北朝鮮は日体大の独壇場となっているが、これは遠征費用をご寄付して下さる方々の賜物である。訪朝には大学の経費を計上することはできない。政府が「行かないで欲しい」という国に国税が入っている大学の金を使うことは許されず、すべからず寄付金で賄っている。で、役員については自己負担としてきた。

いつの日か、朝鮮との国交が結ばれたならば、日体大のスポーツ交流が歴史に残る行動となるにちがいない。他大学ではできず、歴史と伝統を誇る日体大であるからこそ可能ならしめた訪朝であり、かの国にも日体大の卒業生がいる。ことも知っておかねばならない。とくに器械体操や柔道等は、日体大の卒業生によって普及・強化されたと伝え聞いた。学校教育の中でも卒業生たちは貢献されたという。やはり、日体大は世界の日体大なのだ。

すでに100名以上の日体大生が訪朝したことになる。この遠征は強化にも役立っているうえ、一人一人の学生が国際社会に興味をもつ動機づけとなっている。そこで、スポーツ交流の大切さと、その意義について十分学んだと思う。グローバル化された社会にあつて、日体大生も国際人へと脱皮する必要がある。大学が「国際化」を標榜し、国際人の育成に努力されている起爆剤ともなる。

私は、この朝鮮遠征というスポーツ交流を毎年続け、友好第一とする親善試合および合同練習を行いたいと考えている。朝鮮では最も人気高いスポーツはサッカーである。男女ともに盛んであるばかりか、実力もあり、本学にとっても強

化に役立っている。朝鮮体育大は、サッカーの交流を第一に希望するだけに、その要望に応えても行きたいと思う。

レスリング、柔道、バスケットボールのチームも派遣したが、朝鮮体育大に敗れた。相当な強豪といえるだけに、強化試合という意味からも、日体大の強化戦略の一つに朝鮮遠征を加え、一人でも多くの学生たちに異なる文化を体験させたいと考える。

日体大生は親善大使

朝鮮政府は、日体大チームを国賓なみの待遇で迎え入れてくれている。これは日本政府への「仲良くしましょう」というメッセージであろう。国家間、とくに国交のない国との関係にあつては、外交上、メッセージを読み説くことが大切だとされる。その意味においても、日体大の訪朝は外交上も極めて大きな貢献をしているといえよう。

それでも、私たちは政府高官と食事を共にしても、政治的課題を持ち出すことなく、あくまでも「スポーツ交流」に徹してきた。外交は政府の行う仕事であり、私たちの出る幕はない。二元外交も許されず、何よりも外務省に迷惑をかけすることはできない。訪朝だけでも大きなメッセージ、日本政府が日体大の行動に対し、たいした協力はしてくれないにつけても、まったくの邪魔らしき行為でもないのだから、メッセージ性を理解してくれているのは申すまでもなからう。

朝鮮政府、とりわけ朝日友好親善協会の歓迎ぶりは想像以上である。この協会は労働党の傘下にある有力団体で、日朝関係の重要政策を遂行する組織だと教えられた。同時に朝鮮外務省とも密接な関係にあり、日体大を大切に扱ってくれる理由を読み取ることでできた。政府高官が観戦に姿を見せにくれたうえ、私も役員と歓談できる時間をとってくれるサービスぶり、朝鮮政府の気の配りようが十分に私たちに伝わってきた。

平壤市内の観光地は当然のことながら、国民でも見学できない施設を時間があれば視察のために案内してくれた。私どもの希望も殆ど実現できたばかりか、世界遺産に登録された名所もすべて案内してくれたのである。また、公開し

ていない重要な壁画や資料までも、VIP待遇よろしく見学できたのは忘れがたい。

役員のみならず、学生たちに対しても、有効に各施設を見学させていただき、あちこちで友好の波を漂わせてくれた。日体大の学生たちは、一人一人親善大使の任を帯びているのかのごとく、どこへ行つても笑顔で友好に努めてくれたのが嬉しい。試合や練習で見せる険しい顔ではなく、一人の日体大生として外交官の仕事をしてきたと誇りに思う。

これらの体験は、将来にわたって貴重なものとなるうし、多くのことを学んだにちがいない。



日体大女子と朝鮮体大の試合、観衆3万人（金日成競技場）

各メディアを通じて断片的な知識をもって訪朝したのであるに、実際は報道とは異なる点に気づき、やはり「百聞は一見に如かず」を経験したのも大きな収穫だったにちがいない。

友好のトップランナー

朝鮮の観衆は、無理に強制的に動員されていないと耳にした。国民がサッカー好きで、試合があるたび大観衆が集まるといふ。日体大のごとく、外国からのチームとの国際試合は人気が高いらしい。初訪朝の際は4万人、二度目は5万人、そして今年は3万人であった。国内事

情で今回は満員にならなかったが、3万人といっても凄く観衆である。マナーとして、国民は二手に別れて相手チームも応援するそうだが、朝鮮語であるがため、あまり理解できなかった。しかし、朝鮮国民は、私たちが想像しているような日本人嫌いではなく、とても友好的という印象をうけた。

金日成競技場は平壤市内の中央にあり、近代的で大型のスクリーンも完備されていた。驚くべきことは、場内アナウンスである。二回目の遠征からは、朝鮮語の次に日本語でアナウンスされるようになった。しかも流暢で正確な標準語の発音による日本語であった。平壤で日本語が使われるのは稀有なことであるらしい。この現象も日体大が歓迎されている一つの証左であろう。

今年は東京の朝鮮大学校の母国訪問団が応援観戦をしてくれた。日体大の学生たちと歓談する姿がほほえましかった。3年前から両大学で交流協定が締結され、盛んに交流しているので違和感がない。学生たちの視野が拡がり、いろんな経験ができる教育効果は大いといえる。この両大学の交流と朝鮮遠征によって感激して下さった朝鮮大同窓会の副会長であられる裴光幸氏が、大きくて立派な「朝鮮刺繍」を4点も日体大に寄贈されたのである。東京・世田谷キャンパスの会議室に飾られていて、その芸術性の高さに驚嘆させられようか。

さて、試合の方は、さすがに日体大の男女チームの実力は高い。今年は敗れたとはいえ、試合内容は互角であった。パワー、スピード、持久力、いずれも劣つてはならず、逆に技術力の素晴らしさが光っていた。大観衆の拍手の多さが、それらのことを物語つていようか。朝鮮政府幹部も日体大チームを賞賛され、「交流を続けて行きたい、毎年、訪朝して下さい」とのこと。

ともあれ、国際化と世界平和、スポーツの持つ独特の友好関係、日体大は日本を代表する体育大学として、スポーツを軸に貢献せねばならない宿命を背負っている。オリンピック・パラリンピックを2020年に控えた国は、偏見を捨てて、すべての国と交流すべきである。日体大は、そのトップランナーを務める。



日体大が刻んだ125年 これまでと、これから



学校法人日本体育大学
今村 裕 常務理事

— 来年2016年に日本体育大学創立125周年を迎えます。節目の年が楽しみです。

1891年(明治24年)、当時の東京市牛込区に日本体育大学の設立母体である日本体育会が創立されてから、来年で125年の時が経ちます。「国民体育の振興」という建学の精神は、現在の本学にも脈々と息づいています。おかげさまで創立125周年記念式典の日程も決まっております。2016年6月18日の13時から14時30分まで東京・世田谷キャンパスのメインアリーナで開催いたします。かつて日体往原高等学校の運動会に昭和天皇のご親臨の栄を賜った来歴がございますので、今回の記

日体大が守っていかなければいけないこと。引き継いでいかなければいけないこと。そして、変化を恐れず、果敢に挑戦していかなければいけないこと。

それらを、来年の125周年の節目に、私たちはあらためて考えていきたい。この歴史の重みをどう受けとめていけば良いか、さらに次の時代でなにを目指すべきか。

今村裕常務理事にお話をうかがった。

国際間の連携がますます緊密になっている。そこでは、スポーツが重要な役割を担う。2020年東京オリンピック・パラリンピックは日本と世界との絆を深める好機となるだろう。

アスリートはもちろんのこと、すべての学生・関係者が世界舞台の一員である。伝統ある日体生であることを誇りに、世界へ、未来へ力強い一歩を踏み出していきたい。オール日体の漲る力を結集し、日体大は進化を続けていく。

— 念式典にも皇室よりご臨席賜うことができるよう願っています。

— 125周年記念事業は、具体的にどのようなことが予定されているのでしょうか？

まずは、「体育研究発表実演会」を横浜アリーナで今年の11月11日と12日の2日間の日程で執り行います。なかなか入場券が手に入らない実情もありますし、来年は創立125周年ということで、今年は2回に分けて開催いたします。実演会にはドイツスポーツ大学ケルンや北京体育大学など、本学と交流協定を締結している学校も招待しています。そのほか、「記念誌の発行」、「川柳・作文の公募」、「胸像・銅像の除幕式」、千代田区の九段会館の中にある日体大発祥の地に建てられた「記念標柱の更新」、「記念寄付金の募集」、「日体オリンピック(オリンピック出場者・出場経験者)クラブの発足」、「卒業生名簿の再編集」など、創立125周年を盛り上げるためのさまざまな記念事業を計画しています。これまでオリンピックでは34

個の金メダルを日体大のオリンピックが獲得しています。2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けても大きな期待を寄せられている大学ですから、みなさまの期待に応えられるような存在でこれからもあり続けたいと思っています。

—こうした数々の記念事業を通じて、大学内外に伝えたいことは何でしょうか？

いま入学してくる学生と日体大が創立された当時の学生の気質や背景は全然違うでしょう。ただ、いまの学生たちには大学の長い歴史の流れを経て、現在自分たちがこの大学で学んでいるということを強く認識してほしいと思っています。第二次世界大戦の学徒出陣の際には本学の学生も相当数戦死されています。繰り返しにはなりますが、そういう幾多の悲しい大学の歴史を経ていまの日体大があり、いま自分たちがこの大学で学んでいるわけですから、125周年記念事業を通じて、日体大が刻んだ125年の「これまで」と「これから」について、この機会に理解を深めてほしいと思っています。また、将来に向けて、日体大はこれからも永遠に輝き続けなければなりません。日体大が教育界、実業界をはじめ社会に貢献するトップランナーの大学であり続ける使命を大学経営者や幹部をはじめ現場の教員、そして全職員が念頭に置いて、日々の行動につとめ、努力をしていかなければなりません。

—大学経営に携わるお立場から、これからの日体大をどのように運営していくか、その方向性やお考えをお聞かせください。

大学は社会が必要とする人材を常に追求し、そのための調査・研究をして、そうした優秀

な人材を輩出する役目を背負っていると思います。大学は社会にとつてみると、一般企業も含めた世の中の先導者という側面を持っています。国家資格である柔道整復師や救急救命士を養成する保健医療学部を本学が新たに設置したように、今後社会で必要とされる人材を養成

するための取り組みの研究は続けています。また、文部科学省からも海外からの教員や留学生の積極的な受け入れを打診されていますし、さらに今後は日体大の卒業生を含めた交流活動も活発にしていきたいと考えています。その一つが地方自治体との体育スポーツ連携協定です。岡山県美作市のある高等学校が少子高齢化で経営環境が厳しくなってきたとのことで、日体大に引き取ってほしいという打診がありました。しかし、資金がかかることから、一度はお断りしましたが、まずは体育・スポーツの振興に関する連携協定を締結し、多岐に亘り研究していくための推進協議会を発足させました。昨年の11月末から12月初旬にかけてのことでした。すると、教育委員会を含めて、教育界には日体大の多数の卒業生がいますから、締結希望の地方公共団体が殺到し、33の公共団体が申し込みできており、現在、22の団体と協定を締結いたしました。その結果それらの地方の中・高校生のアスリートが日体大のゲストハウスに集まって、オリンピックとの対話や実際にオリンピックと競技種目のトレーニングをすることで交流を深め、中・高校生の参加者の中には「将来は日体大に入りたい」と感想を話してくれました。5年後の東京オリンピック・パラリンピックを見据えると、いまの中・高校生の人材育成が重要で、今回の研修会実施は将来的な学生募集につながり、思わぬ波及効果が出てきました。地域によっては、その

日体大の挑戦が加速する

～創立125周年記念事業と将来展望～

地域の日体大の同窓会がメンバー不足で数年後には同窓会がなくなってしまうのではないかと危惧されるぐらい、日体大さえも、地方からの学生獲得は今後の課題です。今後も危機感を持って取り組んでいきたいと考えます。

—125周年を迎えるにあたって、学生に向けてのメッセージを聞かせてください。

日体大は教員養成の学校という一面を持つ一方、世界に向け発信しネットワークを築いていますから、この日体大で学業・スポーツの研究、研究とあらゆる可能性にチャレンジをして、世界に羽ばたく、社会に貢献できる日体大生になつてほしいと思います。そのためには経験が必要です。海外留学はもちろんのこと、JICA（国際協力機構）を含めた国際交流など、スポーツも、学業も、その時でないときでないことに取り組み、さまざまな経験を積んでほしいと思います。また、良い友人、良い上司をつかむことも重要です。一生で自分が影響を受ける人間は3人と言われていますが、それは自分の目で見極めるしかありません。その見極めにも経験が必要です。私が学校経営の師と仰ぐ母校の創立者は、常に仕事の傍らで私に経営者としての範を示してくれました。その姿は繊細で、大胆で、実に刺激的で何よりも誠実でした。いま、自ずとその仕事を引き継いでいると認識しています。社会に出て良い上司と出会うことが、人間として成長する上で最も重要なことだと思います。そしてもう一つ、言えることがあるとすれば、いろいろな困難が起きたときに、全部前向きに捉えることです。ある面ではチャンスなのです。もちろん、日体大も常に前進し、困難も厭わず、次の時代に向けて挑戦と進化を続けていきます。

ラジオを心から愛する男。マスコミの営業の第二線で活躍できるのも、日体大の密な人間関係の中で培った体と気持ちの逞しさがあればこそ。

あなたはラジオ派、ネット派、音楽派？ 独りの時間の過ごし方は人それぞれだろう。ラジオの向こうのパーソナリティが自分だけに語りかけてくれる親近感、リアリティ、温かさ。そんなラジオの魅力に惹きつけられて、マスコミの第一線で活躍しているOBがいる。日体大出身者の中では異色の存在かもしれないが、夢をひたむきに追いかける情熱、営業の現場で発揮される人に好かれる力、困難を乗り越える力は、まさに日体生に共通する強みだろう。後藤氏は言う。「日体ブランドは誇り」であると。

仕事は人。人とかかわり、生き抜く力を日体大で学んだ

「マスコミで活躍している先輩」などと紹介されると、自分とはまったく違う存在だと思ってしまう人もいるでしょう。ですが、私自身はそんなふうに思っていない。ラジオが特別に好きだったことはありますが、そのほかはごくふつうの日体生でした。

日体大に入学しようと思ったのは高校2年生の時です。神奈川県県立高校に在学し、サッカー部に所属していました。そこに、教育実習生として日体大のサッカー部の先輩がやってきました。当時、日体大のサッカー部は1部リーグに所属しており、指導体制やチームの雰囲気について話を聞くうちに憧れを抱いたのがきっかけです。高いレベルの中でプレーできる、選手として頑張れる環境があると思い魅力を感じました。

一般人試で日体大に入学し、サッカー部に入学。そこで衝撃を受けます。部員数は当時300〜400人。どうやって頭角を現していくか。そこから、日体生としては「あたりまえの」、世間一般からすれば「注目すべき」体験が始まります。それは、日体大で学んでいなかったらいまの私はなかったとさえ思えるほどの貴重な体験でした。いま、私はラジオ局でクライアントやスポン



活躍する OB

株式会社
TBSラジオ&コミュニケーションズ
営業統括局 営業部

後藤 一氏

INTERVIEW

サーをまわって番組のセールスや企画を提案する仕事をしています。企画内容や聴取率（テレビで言う視聴率）などのデータをプレゼンして、お金を稼ぐわけですが、正直なところプレゼンの善し悪しの前に、自分という人間を認めてもらったり、好きになつてもらわれないと仕事は進みません。そこで、日体大出身ということにどれだけ助けられたか。そもそも、ふつうの大学では経験できない体育の授業の話、部活動の話、エッサツサや集団行動の話、それだけでビジネスの場や食事の席でみんな興味深々です。営業はもちろんですが、どんな仕事でも、人とかちゃんと接することができなかったり、自分という人間をアピールできなかったりしたらやつていけません。振り返ると、日体大で学ぶうちに、自然にそれができるようになった気がします。

部員300〜400人、トップから始まり12〜13チームがある中でいろいろな個性や能力の人がいて、先輩や後輩と関わり合い、多くのことを学んでいく。生き抜く術やアピールする術も身につく。また、海浜実習、キャンプ実習、スキー実習、ゴルフ実習、スケート実習と、実習と名のつくものはすべて参加しました。仲間たちと同じ目標に一つになって取り組んでいく。こんな密な人間関係が築ける環境はほかにはありません。世間の人は体育会系というと厳しいだけのイメージ

ジでとらえがちですが、それは外からの上辺の理解や誤解でしょう。厳しい中にも愛情がある。本物の体育会系の良さが日体大にはありました。

勉強は後からついてくるかもしれないませんが、人としての強さ、逞しさ、責任感や物事をやり遂げる力、人との付き合い方を鍛えるのはいまいしありません。あえて言えば、社会に出れば偏差値だけが実力じゃないんです。ガッツや忍耐力、どのような環境にも柔軟に合わせていく力、知識だけではないもつと本質的な人間力を4年間かけて養うことができる。そこそが日体ブランドです。だって、部活動をやっていたら、毎日がピンチの連続じゃないですか。

ラジオの一体感がたまらない

ラジオの魅力ってなんででしょうか。私は中学生の頃から深夜放送にはまっていました。こっそり大人の世界を垣間見るようなドキドキ感があつたことを覚えています。大学時代に怪我をしてリハビリをしている時はラジオに支えられました。リハビリの辛さも、ラジオを聴いていると忘れることができました。

テレビはみんなで見るほうが楽しいかもしれませんが、ラジオは一对一のメディアなんです。パーソナリティが自分だけに語りかけてくれる。仲間



後藤 一(ごとう すぐる)／2002年、体育学部卒業。サッカーは小学2年から。以降、大学までサッカー漬けの毎日過ごす。神奈川県立往田高校から日体大に入学しサッカー部に所属。卒業後、FM局で9年間、ADやディレクターとして制作現場を経験した後、2011年、(株)TBSラジオ&コミュニケーションズ入社(営業統括局営業部)。いまはサッカーから遠ざかっているが、仕事柄クライアントとゴルフを楽しむことが多い。そこでも日体大で培ったコミュニケーション力を発揮する。

のようだったり、兄弟のようだったり、支えてくれる人だったり、勉強している時もトレーニングしている時も、そばにいてくれる感覚というものがあつて、それが聴く人の心をほっとさせるのではないのでしょうか。

ラジオの命はリアリティです。画のない、音だけのメディアなので、嘘をついたり、真実でないことを話したりすると、リスナーにすぐ伝わってしまいます。一方、パーソナリティのほうも、一対一でリスナーと向き合っていると思うと、テレビでは言えない本音をつい話してしまうことがあります。お互いに信頼感があつて、お笑い芸人がどんな顔をしてしゃべっているのだろうか、このメールの話はどんな様子なんだろうと、自分なりにイメージを描いて、心に取り込んで楽しむ。生放送が多いのも特徴で、スタジオで起きていることをリアルタイムで感じることができます。メディアの中で送り手と受け手の距離感が最も近いのが

ラジオです。

制作の立場から言っても、同じように仲間意識、距離の近さを感じます。テレビは何十人もスタッフが取録に携わりますが、ラジオはせいぜい5〜6人。少ない時は2〜3人で番組を作ります。出演者との距離も近いですし、コメントを寄せてくださるリスナーも含めて、みんなで一緒に作っていく手作りがたまらないですね。新しいことを、面白いことを、これからもどんどん発掘して、伝え続けていきたいと思っています。

好きなことを貫き、夢を諦めない

就職活動の時は、好きなことをとことんやろうとこだわりました。いまやりたい仕事に就いて楽しく働いていますが、それまでの道のりが順調だったわけではありません。現職のTBSラジオも、実は学生時代に受験して一度不合格になって

いるのです。テレビ、ラジオ局を受けてもなかなか内定をもらえません。ですが、自分の気持ちに正直でいたいと考え、なんとせつかく貫ついていた信用金庫の内定を卒業間際に辞退し、FM局のADのアルバイトからスタートしました。

放送局というと華やいだイメージがありますが、現実はずごく泥臭い世界で、最初の2〜3年は1週間のうち半日休みがあれば良いぐらい、番組の準備、原稿づくり、楽曲の選曲、リスナーからのメールのチェックと、必死で走り回っていました。ただ、ラジオが好きでしたから辞めたいとは全然思いませんでした。それに、日体大出身ですから…。

そして、TBSラジオに「リベンジ(?)」を果たしたわけですね。日体大の先生方には怒られてしまいかもしませんが、社会人のスタートは内定辞退したうえに正社員ではなくアルバイト。でも、やりたいことに近づくために、とにかくコツコツと努力を続けてきたことで、10年後に夢が叶いました。いま就職活動中の人もいると思いますが、新卒のタイミングで、もし夢が100%叶わなくても、目標に向かって頑張っていれば、必ず近づくことができるはずです。諦めないで、社会に出てからもやりたいことを追いかけてほしいと思います。

若者のラジオ離れが進んでいると言われていきます。いまは、ポッドキャストやradio co(ラジオ)など、いろいろな聴き方でラジオを楽しむことができます。そういったことをもつとアピールして、若い人にもラジオの楽しさを伝えていくことが、いまの私の目標です。一度聴けば、意外と面白いと思ってもらえるはずです。

それから、日体大出身者はマスコミの世界ではまだそれほど多くありませんが、私が日体大のブランドに恥じないように働くことによって、この世界に興味をもって活躍する人が増えてほしいと思っています。日体生、大歓迎です。

輝け！「体育大女子」。自信をもち、夢に向かって努力を継続すれば必ずすばらしい将来が待っている。そして、すてきな出会いも…。

あこがれる人も多いブライダル業界の仕事。披露宴の司会業で活躍する斉藤桃子さん。新郎新婦の幸せを演出できるのも、自身の生き方が充実していればこそ。高校や日体大では、部の立ち上げや発展に奔走。いまでも続くラクロスの大会「つま恋SPRING CUP」の発足にも携わった。そして、友人の言葉に背中を押されて、念願のブライダル業界に転身。これまで数多くの披露宴の司会を手がけるとともに、いま後進の指導にも力を注ぐ。「体育大女子」のプライドを誇りに、まぶしく輝いている。

部活も自分探しも行動派 友人のひと言で結婚式の司会業に

大学時代からブライダルの仕事がしたいという漠然とした思いをもっていました。ただ教育実習にも行きましたし、いろいろな選択肢があるなかで、将来について悩んだことも確かです。結局、卒業後はマーケティング関係の会社に就職しました。

3年ほど勤めたときのこと。ブライダルの仕事への夢が捨てきれないまま、友人と話をしていると「司会がいいじゃない」と運命のひとつ。「これだ!」と直感しました。プランナーはちよつと違う。司会なら、自分らしくブライダルの仕事ができると確信しました。そして、すぐに職場に退職届を提出。半年間MCスクールに通った後、合格率6%である現所属事務所の狭き門を叩きました。

思えば、活動的なところが私の強みです。高校時代は、友人と二緒に署名を集めて水泳部を創部。しかしスポーツ二辺倒ということではなく、校外の野球チームのマネージャーも務めていました。

日体大に入学すると、たまたま先輩に声をかけていただいてラクロス部に入学しました。当時は創部2年目で、他の部に遠慮しながら練習する肩身の狭い日々でした。その後、ここでも持ち前の行動力を発揮し、学友会の部昇格に奔走します。また、イベントの企画会社の方と一緒に、ラクロスの大会を立ち上げたことも思い出です。いまでも「つま恋



活躍する OG

株式会社
ハセガワエスティ取締役

斉藤 桃子 氏

INTERVIEW

SPRING CUP」として継続しています。

そのほか、ラクロス部で後輩を指導することほもちろん、日体大在学中に他大学でもコーチを務めたり、専門学校の体育講師のアルバイトをしたり、いろいろなことに挑戦しました。

あらためて考えると、「教える」ということがキーワードになっていたような気がします。保育士をめざして日本体育大学女子短期大学(当時)に入学。保育に限定されず広がりを感じる日体大の世界観が魅力で、日体大しか考えられませんでした。さらに教える幅を広げたいと思い体育学部へ編入学。みなさんと同じように教育実習と就職活動に悩みながらも、その結果卒業後によりやく夢が叶ったというのが私の経緯です。

結婚式の披露宴はチームプレーです。多くのスタッフが一つになってお二人を幸せにする。同じ披露宴は一つもない。司会は決まった台本があるわけではなく、状況に応じた進行が求められます。チームワーク、リズム感、場の空気を読む力、すべてスポーツの経験が活かされています。お客様、目上の人を立てる、後輩を育てるといった上下関係もラクロス部で学んだことです。

いま後輩司会者の育成にも携わり、行動派として試行錯誤しながら挑戦してきたさまざまなことが、すべて二つにつながってきたような気がします。

「体育大女子」であることに誇りを

ある披露宴の打ち合わせにうかがったとき、「あなたは日体大出身ですか。それなら安心して任せられる。司会者と一言から、テレビの女子アナみたいなのが来るのかと思っていました」と言われたことがあります。すごくうれしかったことを覚えてます。

社会で求められているのは、この人なら安心して仕事を任せることができるという信頼感なのです。それは、司会業に限らずどんな仕事でも同じです。外見の華やかさであったり、語学に堪能であったり、そういうことだけでは決してありません。

私は「体育会系」という言葉には違和感を覚えます。体力勝負とかお酒に強いとか、そういうことではありません。私は「体育大女子」と胸を張りたいです。ルールを守ることができる。責任感がある。正義感がある。頼れる存在である。他の女子大生はできない体育・スポーツならではのさまざまな経験を通して、これらの資質が自然と身につけているはずです。内面的な美しさが「体育大女子」にはたくさんあるのです。

頭ではわかっていても、就職活動や面接試験の場などでなかなかそれを伝えることができないという



斉藤 桃子(さいとう ももこ)／神奈川県立荏田高校から日本体育大学女子短期大学保育科(当時)に入学。体育学部にて2年次編入学。現在、取締役を務める(株)ハセガワエステは、全国のホテル・結婚式場等と契約し、ブライダル司会・MCのコーディネートや育成、ブライダル音響や音楽演奏事業を展開する中、南青山たんぽぽ保育所を開設し働く女性を支援している。忙しい日々のなかでマイブームはキックボード。最初はお子さんのために購入したが、いまはご自身もキックボードで買い物に出かけることがあるとか。

4年間続けることの美学

披露宴の司会の仕事は、社会に出てから10年後、20年後、本当に親しい友人が久しぶりに集う、そういう場に立ち会うことです。結婚式に招待する友人はこれまでの人生のなかで、そしてこれからのお付き合いでも特別な人でしょう。日体大出身者の披露宴を担当することもあります。長い時を経たご友人がエッサッサや荏原体育をご披露くださるのも特別なひとときです。

仲間を増やす、部活動を継続することは貴重な財産になります。「4年間続けることの美学」があると、私は思います。つらい1年があつて、ひたすら走る2年があつて、3年でのいろいろ迷つて、でも4年でもつと頑張つて、卒業式にかけがえのないメンバーが残る。卒業式は共に頑張ったことへの表彰式なのです。試合に勝った負けたは別の話です。

言葉で言い尽くせないですが、まさに苦楽を共にした、お互いを知り尽くした深い絆で結ばれます。その仲間が永遠に続いていく。披露宴の司会を務めさせていただいていると、そのことの重みをいつも感じます。

私自身も当時のラクロス部の先輩や仲間といまでもお付き合いさせていただいています。私の仕事は土日がメインなため、しばらくは司会業のかたわらラクロス部のコーチを務めていました。毎年4年生を送り出すたびに感無量になつて私まで涙ぐんでしまうような気持ちになりましたし、3年生で辞めてしまった学生に会うとすごく切ない気持ちになりました。部活動をやっていない人は、アルバイトでも良いでしょう。そこに集まる仲間を大切に、結婚式に招待したいと思う友人を一人でも多く見つけてほしいと思います。

現役学生のみなさん、お世話になつた先輩、出会う先輩、すべての「体育大女子」にエールを送ります。日体大もどんどん進化していると聞いていますが、伝統を大事にしつつ、社会で輝く人材をますます送り出して、日体大で学ぶすばらしさを証明し続けてほしいと思います。いまスポーツができる大学はたくさんありますが、日体大でなければ学べないこと、経験できないことが必ずあるはずです。日体大で得たことは、教員だけでなく、社会のさまざまな場で活かすことができます。

ブライダルの司会業は女性が輝ける仕事です。結婚しても、子どもが生まれてからも続けることができます。新婦と私が同年代のとき、私が妻になつたとき、母になつたとき、それぞれの立ち位置で、歳を重ねるにつれて、ますます良い仕事ができると感じています。

そして、いま私が司会の仕事とともに取り組んでいるのが女性の応援。たとえば婚活のサポートです。これからも、「体育大女子」はもちろん、女性たちが輝くために応援し続けていきます。披露宴でお会いできたうれしいですね。私も、みなさんと同じように、気持ちは永遠に日体生です。

日体生なら
知っておきたい！

スポーツ・健康 ワンポイントゼミ



【プロフィール】

武藤芳照(むとう・よしてる)

(日体大総合研究所長／保健医療学部教授)

名古屋大学医学部卒。東京大学大学院教授、同教育学研究科長・教育学部長を経て2011年東京大学理事・副学長、2012年東京大学名誉教授、2013年4月より日体大総合研究所所長。2014年4月日本体育大学保健医療学部教授。医学博士。『子どものスポーツ』『疲労骨折』『運動療法ガイド』をはじめ、スポーツ医学、身体教育学、運動処方関係の著書多数。

児童生徒等の健康診断の改正の経緯や概要を教えてください。

前回の第1回では、子どものからだの二極化現象が進展していることをお話ししました。現代の子どもは運動不足の子どもと幼いころから特定のスポーツの専門的訓練を受けてきた運動過多の子どもに大別され、前者には運動器機能不全(いわゆる「からだの固い子」)が生じ、後者には多くのスポーツ障害が生じるようになっていきます。これについては、学校現場やスポーツ現場でさまざまな指摘がされてきました。必要な質と量の運動が行われなければ、からだが固く、適切にからだを動かすことができない子どもに育ち、日常生活にも影響を及ぼすこととなります。また心とからだに合わない形で質と量の運動が行われれば、スポーツ外傷・障害やスポーツ事故

が起こりやすくなります。

子どものからだの二極化現象を改善しようと、さまざまな領域の方々が研究を重ねてきました。その中で全国に約1400万人にも及ぶ児童や生徒のからだをチェックするには、学校現場での健康診断や体力測定で取得できたデータやその結果を活用しながら、適切な処置やアドバイス、医療的アプローチを行うことが効果的ではないかという結論に達しました。

全国で毎年6月までに行われている学校の健康診断の検査項目を工夫・改善することで、子どものからだの二極化現象を早めにチェックするのが望ましいと、11年ほど前から私も理事の一人として所属する一般財団法人運動器の10年・日本協会

が中心となって、政府や文部科学省、日本医師会、日本学校保健会などに働きかけ続けてきました。その結果、平成26年(2014年)4月30日に「学校保健安全法施行規則の一部を改正する省令」が公布され、児童生徒等の健康診断の検査項目のいくつかが変更されました。具体的には座高、寄生虫卵の有無の検査を必須項目から削除。運動器(※)に関する検査を必須項目に追加。保健調査の実施を小・中・高等学校、高等専門学校の全学年対象とすること。以上が主な検査項目の変更点になります。

※運動器：骨、関節、筋肉、靱帯、腱、神経など、身体を支えたり、動かしたりする器官の総称

第2回テーマ

いま子どものからだに 何が起きているのか(2)

日体大が誇る体育・スポーツ・健康・教育の専門家が身近な話題を取り上げてわかりやすく解説するコーナーです。

運動不足と過多による子どものからだの障害を防ぐために、さまざまな取り組みが行われています。

前回に続き武藤芳照先生が、2016年から実施される学校健康診断の改正について解説します。

健康診断の実施にあたって検討すべきことはなんですか？

学校保健安全法の規則が変わったことで日本学校保健会から学校現場での健康診断マニュアルの改定版が新たに提供されています。最大の特徴が保健調査票の活用です。肩や両腕を上げてみる、肘はきちんと

で膝の負傷と診断された場合は、どうやって専門家に診てもらおうのか、その仕組みを構築するための勉強会や意見交換会も必要でしょう。

ように早期発見をして適切な処置を施す。そのための体制づくりが必要であることを訴えてきました。

今回の省令改正により、我々の一定の目標は達成されましたが、学校現場ではどうやって実行していけばいいのか、まだまだ疑問や不安も多くあります。私も昨年と今年、東北六県や大阪市、京都府など全国各地に呼ばれて、学校現場での健康診断が見直された目的やその結果何が求められているのかをお話をする機会がありました。子どもたちが生涯にわたって運動やスポーツができるように、運動不足の子どもにはそれを補う活動を促し、運動過多に陥っている子どもにはそうならない

のか。いまの子どもたちはテレビのチャンネル争い一つをとっても、家庭で適切にからだを動かすことが減っています。昔は立ち上がりテレビの前に行ってからチャンネルをひねるなど、膝、足、指、手、腕の動作がありました。いまはリモコンのボタン一つでチャンネルを変えられますから、せいぜい腕と指の動作があるだけです。幼い子どもがからだを動かすという身体活動の重要性の理解を深めて、地域や学校で体育指導ができる体制づくりが急がれています。

からだが固い子はどうすれば改善できるのか。いまの子どもたちはテレビのチャンネル争い一つをとっても、家庭で適切にからだを動かすことが減っています。昔は立ち上がりテレビの前に行ってからチャンネルをひねるなど、膝、足、指、手、腕の動作がありました。いまはリモコンのボタン一つでチャンネルを変えられますから、せいぜい腕と指の動作があるだけです。幼い子どもがからだを動かすという身体活動の重要性の理解を深めて、地域や学校で体育指導ができる体制づくりが急がれています。

私たちは学校保健の問題をどうとらえれば良いのでしょうか？

今回の健康診断の見直しにおける目的は、子どもたちが生涯にわたって、からだを適切に使って元気に暮らしていくことができるようにすることにあります。現代の日本は超

高齡社会であり、高齡者の比率は全体の26.7%です。いまは「騎馬戦型」の時代と言われ、3人の現役世代が一人のお年寄りを支えています。将来的には一人の現役世代が一人のお年寄りを支える「肩車型」・「おんぶ型」時代がやってきます。いまの子どもたちが現役世代となったときに元気でいることが、究極の介護予防事業でもあるのです。学校保健(児童・生徒等の健康の保持増進を図ること)は、最良の介

護予防事業と捉え物事を考えてほしいと思います。

体育学部、児童スポーツ教育学部、保健医療学部と3つの学部を有している日体大の学生は、子どもの健康を運動、体育、スポーツを通して考えるという社会的使命を背負っています。日常生活でも適切にからだを使うことが子どもたちの発育・発達には必要であることを理解し、学校教育の場や地域社会で外遊びや集団遊びなどの適切な身体活動が確保されるように、将来のそれぞれの持ち場で意識していかなければいけません。単に健康診断の検査項目が変わったことを知るだけでなく、そ

の経緯や歴史、そしてなぜそれが必要であり、今後どうしていくべきなのか、理解を深める必要があります。

そのためにも日体大の学生には、『学校保健安全法』を一度読んでみてほしいと思います。学校保健法になぜ「安全」の言葉が加わったのか。学校教育に安全が謳われることは、教員や保護者は児童・生徒の健康教育と安全教育を担っていることを意味しています。そのことをよく考えてほしいです。ぜひ子どもからだの発育や発達に関心をもってください。

運動器に関する保健調査票のモデル

1. 背骨が曲がっている

後ろから見ると、肩の高さやウエストライン(脇線)、肩甲骨の高さが違う。おじぎをする(前屈姿勢)と、背骨の出っ張りが左右で違う。

2. 体を反らしたり曲げたりすると腰に痛みがある。

おじぎをしたり・かがんだり(屈曲)、反らしたり(伸展)したときに、腰に痛みが出る。〈図参照〉

3. うでやあしに痛みのあるところがある。

特に、肘や膝、かかとに痛いところがある。

4. うでやあしに動きの悪いところがある。

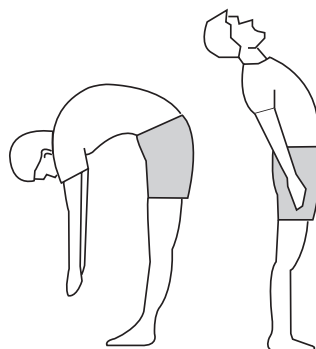
両腕を伸ばすと、片方だけまっすぐ伸びない(最後まで曲げられない)ことがある。膝を曲げ伸ばして、うまく曲げられないことやまっすぐ伸びないことがある。

5. 立ち方や歩き方がぎこちない。

片足立ちすると、ふらつく。

6. うまくしゃがめない。

しゃがむ動作で、膝や股かんせつに痛みがあったり、かかどが浮いてふらつく、後ろに転ぶ。



屈曲時の痛み

伸展時の痛み

選手が自ら学び、よりよく生きるために。
デイスカッションや実践を通して
自らのコーチングを振り返り、質を高めていく。

コーチング学は、単に競技の教え方の研究にとどまるものではない。

競技を通して、選手がどのように生き、成長していくか。教育的な領域まで概念は広がる。言い換えれば、妥協することなく自分自身を向上させていく、コーチの人間性も問われてくることになる。

コーチング学では、徹底して現場と自分に向き合っていく。さらに多様な人々と関わり自己を再構築する。

日体大の大学院研究科には、優れた知見をもつ人々と分け隔てなく触れ合い学び合う環境があると根本先生は語る。

体育科学を リードする

～大学院・研究科の取り組み～

8

●体育科学研究科

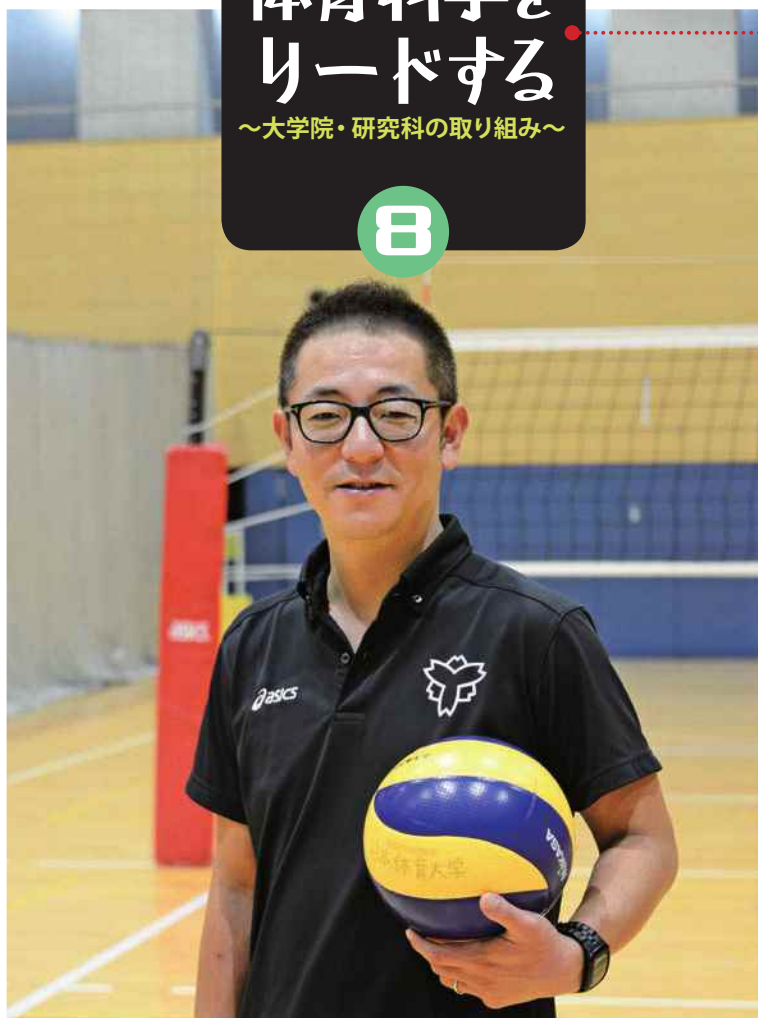
博士前期課程

体育実践学コース

コーチング学系

博士後期課程

教育・コーチング学系



根本 研 准教授

根本 研（ねもと・けん）東京都出身。体育学部体育学科准教授。体育学部体育学科、大学院体育科学研究科（体育科学専攻）トレーニング科学系 博士後期課程単位取得満期退学。修士（体育科学）。監督として輝かしい伝統と実績を誇るバレーボール部（女子）を率いる。変化を恐れず挑戦し続けること、そのプロセスを大切にすることがコーチングでのこだわり。

振り返り、気づき、高めていく

— 先生の研究テーマを教えてください。

コーチング学が基本的な領域です。バレーボール部女子監督を務め、日々選手と接していますから、ここでの指導がそのままケーススタディの材料になります。まさに最前線の現場が私の研究フィールドなのです。

いわゆるアクション・リサーチ（社会に還元して改善につなげる実践的研究）の考え方に基づき、それで行っているコーチングに対して、振り返りを行うことによって自らの能力を高めていくことを研究の目的としています。このアプローチは私も大学院生も変わりません。その意味で、私も共に学ぶ仲間の人だと思っています。実際、コーチング学系の伊藤雅充先生ともよくデイスカッションをさせていただいています。デイスカッションを通して、自分のコーチングを振り返り、課題を抽出してそれに取り組んでいくとともに、さらに最先端の研究で発表されているようなコーチング学の手法などを学び受けることによって、現場に有益なコーチングを試みる、エビデンス・ベースド・コーチング（根拠に基づくコーチング）を実践しています。

— 具体的にはどのような取り組みを行っているのでしょうか。

指導や試合の様子をビデオに撮影し、声かけや振る舞いを振り返っていきます。時には感情的になっていたり、客観的・俯瞰的に状況を観察していなかったりすることがあり、学びには多くの気づきがあります。

そして自分の振る舞いを変えていきますが、やはりそれによって選手のパフォーマンスも変わっていく実感があります。たとえば、伸び悩んでいるある選手に対して、指示的なアプローチから、コーチングで言われるクエスチョニング、相手から答えを引き出すような関わりに変えたところ、自ら考え判断して行動しているようになり、伸び悩んでいた部分により早く気づき改善に至ったケースがありました。「こうしろ」ではなく、「いまのどうだった？」という声かけに変えることによって、コーチが言いたいことを選手自身が気づき、自らが学ぶようになります。気づく喜びや楽

しさを見出すことによって、もつと知りたい、もつとまくなりたいとモチベーションも高まっていくのです。チャレンジする勇気が湧いてくるようなコーチングを目指しています。

いま日体大は、国際的に活躍できるコーチ育成者の養成とコーチ育成者の国際的ネットワーク構築の拠点となることを目指して、日本体育大学スーパーコーチ・アカデミー(NCDA)の事業を展開していますが、大学院コーチング学系で伊藤先生をはじめとする私たち教員が行ってきた試みはその第一歩になったのではないかと思います。

伝える、表現することの大切さ

—コーチング学に興味をもったきっかけはなんですか。

大学院ではトレーニング科学を学び、データや数値を分析して、普遍的な理論や方法を考察してきました。その中で論理的思考が鍛えられたと思っています。スポーツを客観的・分析的に見ることができるようになった一方で、その知見を現場に落とし込もうとした時に、伝える力というのが非常に重要であると感じました。

1999年のスペイン・バルマデマヨルカで開催された第20回ユニバーシアード競技大会に、私はバレーボールの分析・解析を担うアナリストとして帯同しましたが、そこでも伝える力の重要性を実感することになります。そして、コーチング学を知り、興味を持ったのです。もともと教員や指導者になりたいと思って日体大に入学しましたし、バレーボールを教えることはライフワークになっていましたから、コーチングを学ぶことになったのはいわば必然の成り行きだったと思います。

—学生と接する上で心がけていることはなんですか。

ネット型競技という括りで、バレーボールをメインに、サッカーやテニスなど



の学生とも接してきました。先ほどもお話ししたように、教えるというより、伊藤先生をはじめとする他の先生方のサポートをいただきながら、共に学び合うというスタンスを大事にしています。ある意味で、それがコーチングの本質につながるのではないかと思います。

私はいわば学生たちの相談者、メンターのような立ち位置です。バレーボールの学生たちとはフリーディスカッション形式の勉強会を行っています。そこでコーチングの幅みを聞いたり、論文にまとめるにあたり構成や展開の相談にのったりしています。学生のコーチ

ングの様子をビデオに撮って振り返りをすることはもちろん、最近はバレーボールの戦術用語の定義がいまいきになってきている傾向がありますので、それを整理するようなことも行ってきました。

学生のコーチングに対して、良い悪いと指摘するより、現状があるがまま表現することが大切です。これから学生たちに寄り添っていきたいと思っています。

出会いと学びに恵まれた最適な環境

—コーチング学のこれからの方向性は。

コーチング学の本質的なところは変わらないと思います。振り返り、気づき、コーチングの質を高めていくことは、これまでも優れた指導者の方々が実践されてきたことです。

ただ、私のイメージを言えば、どのように教えるか、教える方を研究するというより、選手自身がどう学んでいくか、そのために私たちコーチがどうあるべきかということに着目して、研究が進んでいくのではないかと思います。

たとえば、ロング・ターム・アスリート・デベロップメント(LTAD)という考え方があります。これは、子どもたちが初めて競技に出会ってからその後どのように続けていけば良いか、長期的な観点から選手を育成していくというものです。その人の競技を始める前の生活や人生はどのようなものだったのか、競技を始めたことによって人生がどう変わったか、生活をエンジョイしているか、これからはそういうことでイメーシしながら、コーチも関わっていくことがいっそ求められるのではないかと思います。

最近では自律性支援行動という言葉で表現されていますが、選手自身が自ら学んでいくような環境づくりに、私たちコーチはもっと取り組んでいかなければいけないでしょう。それこそ、まさに日体大のコーチング学系が実践していることです。フィジカルトレーナーやメディカルトレーナー、現場のマネジメントスタッフまで含めて、さまざまなスタッフがミューティングを重ねて、選手のための環境づくりに注力しています。

—今後の抱負を教えてください。

昨年、バレーボール部女子はインカレ日本二になる

ことができました。勝つことはもちろんですが、しかしそれがすべてではないことも認識しています。出会う選手たちをとにかく人生の良い方向に導いていくことが私の役割ですし、そういうコーチングを目指していきたいと思っています。本当の意味で自分を活かす挑戦ができるような環境を整えるとともに、幸せな人生を送ることができるよう寄り添っていきたくします。

—大学院を目指す学生に向けてメッセージをお願いします。

共に学び高めていく素晴らしい環境が日体大にはあります。大学院のコーチング学系には、伊藤先生をはじめコーチング学研究をリードする多彩な先生方、また私のような現場の指導者もいます。すでにコーチとして学内外で活躍している方もいれば、これからコーチング学を学ぼうという学生も集まっています。こうした人たちが一緒にあって、コーチングにおけるテーマや悩みについて、分け隔てなく議論し合い学び合う環境が用意されているのです。これは、日体大ならではの強みです。最先端のコーチング研究を学び、研究のエビデンスを自分の知識として取り込んでいきながら、さらにそれをアウトプットする手法をみんなで見つけていく。そういう実践的な試みがこの学系では体験できます。悩みの答えは現場にあります。さまざまな良きアドバイザー、メンターたちによってそれに気づき、スキルと自信を高めていくことができるのです。

かつて、コーチは孤独な存在だと思われていたこともありますが、コーチはもっと多様な人々からみ合っていて、コーチ自身の能力を高めていかなければいけない時代に変わってきているのではないかと思います。グローバル化が進んでいます。もちろん海外に限らず、学ぶべき人は身の周りにもいます。まったく違う競技の人と話すだけでもいろいろな気づきや学びがあります。大学院での出会いやオープンな学びは、これからの時代を生きる皆さんにとって非常に大きな力になっていくでしょう。コーチとして、人として、真摯に学び続けてください。



Navigators



4年間で人間を研こう

猪越 孝治 (いのこし たかはる) / 保健医療学部 整復医療学科 准教授

空手道の外傷・障害研究、空手手法から健康法研究(中・高齢者)、そして運動療法への導入を柔道整復学として考察して、高齢者社会の保健に携わりたいと思っています。

学生時代は、全日本空手道連盟ナショナルチーム強化コーチであった故 服部久師範指導の中央大学糸東会空手道部に入部して稽古三昧の毎日でした。特に私一人のみ別メニューで厳しく鍛錬していただいたのもいまは楽しい思い出になっています。

大学における4年間は人生に目標を持って打ち込むことのできる貴重な時です。家庭教育、社会教育、学校教育に責任を転嫁しがちな社会ですが、いっそう自立的に生きる逞しさが大切になっています。いまこそが日本体育大学の学生として雄飛できるその時なのです。知育、徳育、体育で心と体を鍛えて、次代のリーダーとして活躍できる人間を目指し自分磨きをしてほしいと望みます。

①栃木県 ②関係法規、運動器の解剖学、運動器損傷治療学実習Ⅱ(後療法) ③中央大学法学部法律学科卒業／筑波大学大学院修士課程体育研究科スポーツ科学専攻修了／六角ばし接骨院開業／日体柔整専門学校非常勤講師／了徳大学健康科学部整復医療・トレーナー学科講師／環太平洋大学体育学部健康科学科准教授／修士(体育学) ④孫と同級の聴覚障害女子空手練習生との稽古



必要な知識を貪欲に吸収する

竹腰 誠 (たけこし まこと) / 体育学部 社会体育学科 准教授

研究テーマは「スキーにおける指導法の研究」です。スキー指導の経験のみならず、科学的にスキー滑走を理解し、指導に役立てるような研究・分析をしたいと考えています。

日体大の学生時代、社会体育学科ではたくさんの同級生に恵まれ、楽しい学生生活を送っていました。スキー部に所属し、インターカレッジ出場を目標にトレーニングに励んでいました。

日体大で学ぶ内容はあとになって「これ聞いたことがある」と思うことが非常に多いと思います。将来、体育・スポーツの世界に進まなくとも、人として、大人として、親として、知っておく必要がある事柄ばかりではないでしょうか。いつか役に立つ…そんな授業を貪欲に聞いてみてください。きっといつの日か「これ聞いたことがある」と思う日が来ます。そしてその時に日体大のことを思い出してください。母校として最高の大学です!

①石川県 ②スキー理論・実習、野外活動論、スキー実習③日本体育大学体育学部社会体育学科卒業／日本体育大学大学院体育学研究科修士課程修了／日本体育大学野外教育研究室助手／神奈川大学経営学部専任講師／神奈川大学経営学部准教授／修士(体育学) ④スキーにゴルフ、数年前からウィンドサーフィンも



目標達成の為に努力を惜しまない

古城 隆利 (こじょう たかし) / 体育学部 社会体育学科 助教

野球におけるコーチング、指導方法を研究しています。一般入試で日体大の門をたたき、当時400人いた野球部の中で3軍からスタートし4年間かけてスタメンを獲得しました。練習だけではなく、普段の生活や休日の過ごし方もプロ野球を見に行くなど野球に結び付けていた学生時代だったと思います。いっす自動車株式会社でプレーした後、同社野球部コーチとして、都市対抗野球大会ベスト8、東京スポニチ大会ベスト4などを経験しました。いまま授業と野球部の練習で健志台の野球場に立つ毎日です。

大学を終れば多くの人は社会人となります。子供のころ夢に見た、又は入学してきた時に希望していた職業につく為に最大限の努力をして大学生活を送ってほしいと思います。

大学生活や部活動など様々なことに積極的にチャレンジして、人間力を磨き、4年間で大きく成長して夢を実現してほしいと思います。

①大分県 ②運動方法・ソフトボール(野球含)、スポーツ実践指導法・ソフトボール(野球含) ③日本体育大学体育学部体育学科卒業／いっす自動車株式会社／日本体育大学スポーツ局スポーツ専門職／日本体育大学大学院体育科学研究科博士前期課程修了／修士(体育科学) ④車が好きで気分転換は毎日の通勤のドライブ

平成27年度に着任された先生方の素顔をご紹介します。 教育・研究にかける思い、日体生への熱い期待を語ります。

※コメント注 ①出身地、②担当科目、③経歴、④趣味、関心のあること



努力する姿は美しい

金 善淑 (きむ そんすく) / 体育学部 体育学科 助教

日本と韓国に対しバドミントンにおける政策や環境および競技力を比較・検討しながら研究を行っています。日本人選手に多いプレースタイルの特徴からウィークポイントとなりうるフォームや動作を分析、そこから韓国での指導方法を基にした問題点改善のための練習方法を理論的に検討します。高いレベルにある選手でも癖や無駄な動作による対応の遅れなど、矯正が必要な部分は少なからず存在します。フットワークの見直しなど基本の徹底は大切だと思います。

私の学生時代はバドミントンに夢中の毎日でした。いま、毎日学業、競技に頑張っている日体大生を見ると元気をもらいます。目標に向かって努力する姿は誰が見ても美しいと思います。継続は力なりといいます。4年間たくさん学び、たくさん経験して下さい。そして社会に貢献出来るような人材になることを期待しています。

①韓国(全州市) ②スポーツ実践指導法・バドミントン、運動方法・バドミントン③全州又石大学文化社会流通通商学部流通通商専攻卒業/日本体育大学大学院体育科学研究科体育科学専攻博士前期課程修了/日本オリンピック委員会専任コーチ・ジュニアスリート担当/日本体育大学スポーツ専門職/修士(体育科学)④部屋の掃除、英会話にも通っています



謙虚に、真摯に学んでほしい

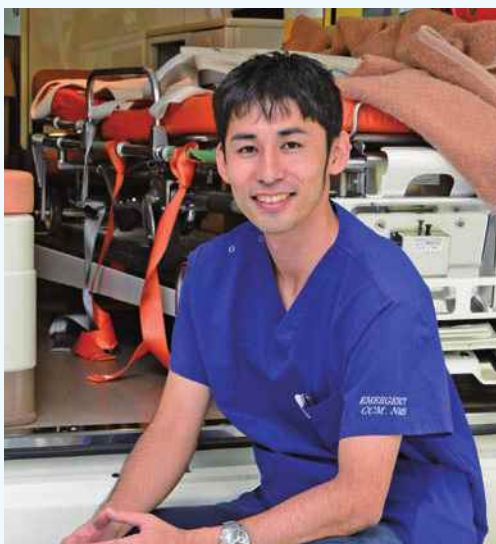
市川 純 (いちかわ じゅん) / 体育学部 教養・教職科 助教

専門は18世紀終わりから19世紀にかけてのイギリス文学です。特に最近のコツェーパ作品の受容、クリスティナ・ロセッティ、日本における『不思議の国のアリス』の受容などについて研究しています。

大学では大事なことを目一杯学べたと思います。専攻の英米文学の他、ドイツ文学、日本文学、哲学、心理学、宗教学、音楽学、ラテン語、などなど。直接関連していないように見える諸学の断片も、食欲に学び続けると知の曼陀羅が浮かび上がるはずで。

私は知的な人が好きなので、皆さんも知的になってください。でも、ちょっと知識が増えたぐらいで威張らないでください。私達が当たり前と思っていることのほとんどが推測や仮説に基づくものです。一人で内省する時間を取っておいってください。本を読んで、考えて、言葉にし、その言葉を真摯に聞いて批判もしてくれる友を見つけてください。

①東京都 ②基礎英語、英語コミュニケーション、異文化コミュニケーション(外国事情)③立教大学大学院文学研究科博士前期課程修了/早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程単位取得満期退学/早稲田大学教育・総合科学学術院助手を経て、早稲田大学、文京学院大学、日本大学、国士館大学にて非常勤講師/博士(学術早大)④古楽が好きで、チェンバロの練習をしています



当たり前のことができる人になる

鈴木 健介 (すずき けんすけ) / 保健医療学部 救急医療学科 助教

研究テーマは、病院前救急救命学、災害医学、学校における緊急時・災害時の対応、災害時におけるロジスティクス、ファーストレスポnderなどです。

学生時代は「いましかできないこと」をテーマに、国内外問わずボランティアから勉強会まで様々な分野にチャレンジしました。その中で救急救命士の専門性を知り、「1人でも多くの人を助ける」ということに強い想いを抱くようになりました。

「目の前で倒れた人を助ける」それが当たり前のようにできる学生を育てたいと考えています。体育やスポーツの分野でもAEDやエビペンなど緊急時の対応が盛んに言われています。そのような緊急事態に冷静に行動し適切な対応ができる「人間力」と「技術」を身に付けてもらいます。日体大の素晴らしい実績と伝統に、救急救命や災害医療を融合し、いざという時に活躍できるよう一緒に勉強しましょう。

①東京都 ②医療英語、病院実習、卒業研究1③国士館大学体育学部スポーツ医科学科卒業、救急救命士・養護教諭免許取得/日本医科大学大学院外科系救急医学修了/日本医科大学多摩永山病院救命救急センター/博士(医学)④仕事が忙しいので休日は家族サービス

団体名	大会名	結果	選手
アーチェリー部	2015年度関東学生アーチェリー男子リーグ戦優勝決定戦	団体1位	
	2016年度関東学生アーチェリー女子リーグ戦優勝決定戦	団体1位	
	全日本アーチェリー連盟第14回世界ユース選手権選考会	1位	小城碧(2)、遠間あずさ(2)
	2015年度第26回全日本学生アーチェリー東日本大会	1位	西野汐梨(3)
合気道部	全日本合気道演武大会	出場	
	全国学生合気道演武大会	出場	
ウエイトリフティング部	第61回全日本学生ウエイトリフティング個人選手権大会	62kg 1位	艾幸太(4)
カヌー部	2015年度第51回全日本学生カヌースプリント選手権大会 第5回全日本学生カヌースプリント新人選手権大会 ＜カヤックカナディアン＞	k-1 200m 1位	井上暉央(2)
		c-2 200m 1位	湯浅友晶(4)、鈴木俊亮(2)
		k-1 リレー 4×500m 1位	井上暉央(2)、宮永翔平(2)、野沢秀平(4)、本間誠(3)
		c-1 リレー 4×500m 1位	鈴木俊亮(2)、湯浅友晶(4)、田淵弘将(3)、篠原総太(4)
少林寺拳法部	東京都大会	大学生女子の部 1位	畔蒜みく(4)、宇野真里奈(2)
		大学生団体の部 1位	
	関東学生新人大会	男子有段 1位	鈴木康平(2)、小森勇輝(1)
		単独茶帯 1位	石川広都(2)
水泳部	第91回日本学生選手権水泳競技大会	400m自由形 1位	五十嵐千尋(2)
		200m自由形 1位	五十嵐千尋(2)
		400mメドレーリレー 1位	川除結花(4)、関口美咲(1)、播磨季美(4)、田尾優里香(4)
		400m個人メドレー 1位	大塚美優(3)
	第91回日本学生選手権水泳競技大会 水球競技	1位	
	第91回日本学生選手権水泳競技大会飛込競技	男子3m飛板飛込 1位	千歩純一(3)
相撲部	第42回東日本学生相撲個人体重別選手権大会	男子3m飛板飛込・男子高飛込 団体優勝	
		男子高飛込 1位	岡島太一(2)
		65kg未満級 1位	秋本良太(2)
		75kg未満級 1位	早田直通(1)
	第40回全国学生相撲個人体重別選手権大会	85kg未満級 1位	今関俊英(2)
		65kg未満級 1位	秋本良太(2)
ソフトボール部(男子)	第30回 東日本大学選手権大会	75kg未満級 優勝	平尾拓摩(3)
		85kg未満級 優勝	今関俊英(2)
		優勝	
		優勝	
体操部	第15回世界体操祭	出場	
トライアスロン部	日本学生トライアスロン選手権観音寺大会	女子団体1位	
	日本学生スプリントトライアスロン選手権 兼 チームタイムトライアル選手権大会	チームTT女子の部 優勝	
トランポリン部	第50回全日本学生トランポリン競技選手権大会	個人女子 Aクラス 1位	佐竹玲奈(3)
		個人男子 Bクラス 1位	笠井明日翔(1)
		団体女子 Aクラス 1位	
		シンクロ男子 Aクラス 1位	筑間友久シヅカ(4)、谷貴文(2)
軟式野球部女子	第29回全日本大学女子野球選手権大会 第21回女子軟式野球ジャパンカップ	シンクロ女子 Aクラス 1位	富田ひとみ(3)、服部佳奈(3)
		1位	
バレーボール部(男子)	平成27年度天皇杯・皇后杯全日本選手権大会	1位	
バレーボール部(女子)	第34回東日本選手権大会	優勝	
フェンシング部	第5回全国サーブルチャレンジカップ北海道大会	女子サーブル 1位	狩野菜々子(1)
ボート部	第60回中日本レガッタ・成年女子ダブルスカル	1位	高橋かほ(2)、川本藍(4)
ライフセービング部	全日ライフセービング学生選手権大会	ビーチリレー(男子) 1位	
		ビーチリレー(女子) 1位	
		ビーチスプリント(女子) 1位	長野文音(3)
		ボードレスキュー(男子) 1位	坂本陸(4)、山口祐太(4)
		レスキューチューブレスキュー(男子) 1位	小椋隆継(4)、宮腰太輔(4)、幡野圭祐(3)、玉井颯(2)
		レスキューチューブレスキュー(女子) 1位	井熊理子(3)、坂本佳凪子(3)、東理沙(3)、村石結美(3)
陸上競技部	第94回関東学生陸上競技対抗選手権大会	サーフスキーレース(男子) 3位	平澤福世(3)
		1000m 1位	山中秀仁(4)
		棒高跳 1位	船本稜矢(3)
		棒高跳 1位	鈴木里菜(2)
レスリング部	JOCジュニアオリンピックカップ	ジュニアの部(フリースタイル) 55kg 1位	長谷川敏裕(1)
		60kg級 1位	樋口黎(2)
		66kg級 1位	澤田夢有人(2)
		74kg級 1位	屋比久翔平(3)
		84kg級 1位	塩川貴太(2)
		96kg級 1位	奈良勇太(2)
	全日本学生レスリング選手権	グレコローマンスタイル 59kg級 1位	文田健一郎(2)
		66kg級 1位	下山田培(3)
		71kg級 1位	澤田夢有人(2)
		80kg級 1位	屋比久翔平(3)
エアロビクス同好会	第15回全日本学生エアロビクス選手権大会	86kg級 1位	松坂誠應(3)
基礎スキー研究会	学生インラインスキー大会	チームチャレンジ部門 2位	
セパタクロール同好会	第20回全日本学生セパタクロールオープン選手権大会	1位	細坪一雅(1)
		1位(男子)	日体男子A
スカッシュ同好会	第38回関東学生スカッシュ選手権大会	1位(女子)	日体女子A
		準優勝	久保田有沙(4)
ダブルダッチサークル	World Jump Rope 世界選手権	シングルスフリースタイル 1位	
	Double Dutch Delight East 2015	フュージョン 1位	B-JACK (チーム名)
	第42回ADDL世界招待選手権大会	オープン部門	Re-bien (チーム名) 高浜力(4)、中村亮太(4)、志村侑亮(4)、小林千尋(4)、塩沢来実(卒)、小玉祐里(4)
		シングルス・ダブルス・ツインズ 1位	
フィンスイミングクラブ	第2回フィンスイミング世界学生選手権大会	50m×4BFリレー 1位	三村逸人(2)、松下真清(2)
		400mBF 1位(男子)	三村逸人(2)
	第27回フィンスイミングクラブ日本選手権大会	200m CMASBF 1位	室井真純(3)
		京辰巴国際水泳場水泳大会2015	女子50mビーフィン 1位



戦没者慰霊式を挙行了いたしました。

平成27年8月6日(木)、東京・世田谷キャンパス慰霊碑前で慰霊式を挙行了いたしました。昭和33年に学内に慰霊碑を建立し、今日まで一日も欠かさずに花をお供えています。戦後70年という節目にあたり、「慰霊式」を挙行することといたしました。学徒動員等によって400名弱もの日体大(当時日本体育専門学校)の学生たちが帰らぬ人となりました。体育・スポーツ指導者を夢見ていた先輩方が、その夢かなわず命を落とした無念さを忘れず、世界平和を誓い、併せてオリンピック・パラリンピックの成功にお力添えをいただきたいという願いを込め、慰霊式を挙行了いたしました。



栃木県鹿沼市支援に本学の学生がボランティアで参加しました。

9月9日に発生した台風18号等の大雨・洪水等により被災された方を支援するため、9月18・19日に本学の救急医療学科の教員及び学生22名が栃木県鹿沼市へボランティア活動として向かいました。①床下からの泥搬出活動②ロジスティクス実践③被災地での出会い等を主な活動とし、ボランティア活動はもちろん、救急医療学科の学生として貴重な経験をすることができました。参加学生からは、自然の恐ろしさ、災害対策の重要性、ボランティアの必要性、などの災害の恐ろしさを知るとともに、今後自分たちが学ぶべき何かを感じ取っていました。



第2回NSSU Coach Developer Academy 国際シンポジウムを開催いたしました。

9月18日(金)、東京・世田谷キャンパス記念講堂において、文部科学省スポーツ・アカデミー形成支援事業の一環として、第2回NSSU Coach Developer Academy 国際シンポジウムを開催いたしました。海外より著名な講師を招き、「アスリート、コーチ、コーチ育成者の学習と育成を促進する教授法」に関する講演やディスカッションを行い、指導者を志している学生や現在指導者として活動している方々へのメッセージとなるシンポジウムとなりました。



学校法人日本体育大学 理事・評議員馳浩氏が文部科学大臣就任。

平成27年10月、学校法人日本体育大学おきまして理事・評議員を務めていただきました馳浩氏が文部科学大臣に就任いたしました。本学関係者から文部科学大臣が誕生したことは大変名誉なことでもあります。10月15日に馳氏の大学時代の恩師であります松浪理事長へ就任のあいさつのため本学を訪れました。職務専念義務のため本学の理事・評議員は退かれますが、これからのご活躍にご期待いたします。

スポーツ・健康をサポートする新拠点



日本体育大学スポーツキュアセンター 横浜・健志台接骨院

10/27^火
OPEN

スポーツによるケガや関節、筋の痛みの治療を専門とするスタッフが治療に当たります。また、最新の評価・治療機器、運動療法機器を備えており、ケガの応急手当からスポーツや日常生活への復帰、再発予防までトータルサポートを提供いたします。キャンパス内に開院いたしますがどなた様にもご利用いただけます。ケガや痛み、ケガの予防でお困りの際は是非当院をご活用下さい。

※当接骨院は保健医療学部整復医療学科附属臨床実習施設として、学生が見学・実習・研修をしております。学生は、経験を積んだ柔道整復師の責任と指導の下、法律で許可された範囲内で施術の補助を行うことがあります。患者さんのご迷惑にならないように配慮しながら臨床実習を行いますので、ご理解とご協力をお願いいたします。

日本体育大学スポーツキュアセンターを通じた 整復医療学科のミッション

- スポーツ競技の発展に柔道整復で貢献します。
- 地域の人々の健康に寄与します。
- 日体大ファミリーに貢献します。



受付時間	月	火	水	木	金	土・日・祝日
12:00~13:00 (予約のみ)	○	○	12:00~18:30 ※水曜日は予約不可	○	休	休
15:00~20:30	○	○		○	○	休

※開院当初はおもに学生を対象とします。また、診療時間は今後拡充していく予定です。

■場所／横浜・健志台キャンパス3号館1階

■お問い合わせ

日本体育大学スポーツキュアセンター横浜・健志台接骨院
info-scc@nittai.ac.jp



最新情報ははこちら!!

<https://www.facebook.com/nssu.scc>

※予約については「Facebook」をご確認下さい。

